

悪役令嬢の矜持^{きようじ}
3

く婚約破棄、
構いませんく

Characters

登場人物紹介

カトリナ

↑
かつてクリスティーナの取り巻きだった伯爵令嬢。

ウェスリー

↑
トリシャの幼馴染兼お目付け役。

トリシャ

↑
フリードの妹。クリスティーナに憧れ敬愛している。

フリード

↑
規格外の武力を持つ辺境伯。クリスティーナに一目惚れし、溺愛している。

アレクシス

↑
この国の王太子。一見、努力家に見えたソフィアを愛するようになり、クリスティーナとの婚約を破棄した。クリスティーナの価値が上がるにつれ、評判を落とすことに――

ソフィア

↑
乙女ゲームのヒロイン。中身は転生者で、その知識を活かし王太子とハッピーエンドを迎えたものの、その後のことを全く考えていなかった。

クリスティーナ

↑
誇り高き公爵令嬢。王太子と婚約していたが、その婚約を破棄され、自身が心の底から愛せる辺境伯であるフリードに嫁ぐ。

目次

芽ぐみ

7

断罪人の鞆だんざいにん
さや

101

黎明を告げるは最果ての地れいめい

115

芽ぐみ

あまり勉強は好きじゃない。

特に魔法学。魔法の素養に欠ける私にとって、魔法学は「こんなの将来何の役に立つの？」の筆頭科目だ。

そんな私が、今——週末の空いた時間、机にかじりついて勉強するには理由がある。

「……トリシャ？」

自室の扉をノックする音が聞こえた。

同時に、聞き馴染んだ声がある。

机から顔を上げ振り向くと、細く開けたドアから予想通りの人物——ウェスリーが顔を覗かせた。「頑張ってるみたいだけど、ちょっと休憩にしない？」

誘いの言葉と共に、彼が扉を開けて入ってくる。手にしたトレイから、紅茶のいい香りが漂ってきた。

一気に集中が解ける。

(すごい。絶妙なタイミング)

匂いを思い切り吸い込んで、両手をうんと上げた。背筋をグイと伸ばすと、凝り固まっていた筋肉が心地よくほぐれる。

「ありがとう。ウェスリー」

礼を言い、机の上に広げっぱなしの魔法学の教科書を閉じる。

ウェスリーは紅茶を給仕しつつ、教科書の表紙に視線を落とした。

「一年次の教科書？」

「うん。……応用が分からないのは基本ができていないからだって言われて」

「そっか。それで最初から……」

彼が対面の椅子に座る。自分用の紅茶カップを持ち上げて笑った。

「偉いね」

「偉くないよ。……今まで手を抜いてたツケが回ってきたの」

「そのツケを自分で払おうとしてるんでしょ？ 偉いよ」

「もう……」

ウェスリーを軽く睨む。

彼の言葉を素直に受け取れなくなったのはいつからだろう。だが、悪いのはウェスリーだ。彼が息をするように頻繁に賞賛を口にするから。

(おまけに、同じ年なのになに一つも子ども扱い……!)

もう一度、ジロリとウェスリーを睨んだ。

丁寧に刈り揃えられた黒髪。斜めに流れた前髪から黒の瞳が覗く。楽しげに煌めくその目から、プイと顔を逸らした。湯気の立つ紅茶にそつと唇を寄せる。

「ん……」

心を満たす香りに頬が弛む。

「美味しい」と伝えようとしたが、開いた口に下ろしっぱなしの髪のがれが入る。

正面からクスリと笑う声が聞こえた。立ち上がったウェスリーが私の背後に回る。

「下ろしたままも可愛いけど、お茶するには邪魔だよね」

鼻歌交じり、楽しげに髪に触れる彼の手に身を委ねる。どこから取り出したのか、ウェスリーはリボンを使った器用に髪をまとめ上げる。

「……相変わらず、上手だね」

「ん？ 何年やってきたと思ってるの」

彼の手が毛先を持ち上げた。

ありふれた茶色。癖が強くて結ぶだけで一苦労の髪が、彼に掛かると魔法のように可愛くまとまる。

改めて「ありがとう」と伝えると、「どういたしまして」と穏やかな声が返ってきた。

ウェスリーが髪から手を離す。その瞬間、部屋の扉が叩かれた。入室を許すと、扉が静かに開かれ、侍女の一人が姿を見せる。

「……トリシャ様。旦那様がお見えます」

「え、お兄様が？」

屋敷の皆が口にする「旦那様」は、亡き父ではなく、現当主——兄を指す。

王都の学園に通う自分とは違い、辺境の領地に身を置く兄。近ごろは王都を訪れる機会も増えていたが、それでも、なんの前触れもなく現れるのは珍しい。

「なんのご用事かしら？ ウェスリー、何か聞いてる？」

振り向いて尋ねるが、ウェスリーは首を横に振って「いいや」と答える。

侍女が再び口を開いた。

「奥様もご一緒されております」

「お義姉様がつ!?」

思わず勢い良く立ち上がる。

座っていた椅子が大きな音を立てた。「はしたない」とは思ったが、もう遅い。それよりも今は急を要する事態だ。

「ウェスリー！ この髪、変じゃない？ 服は……、ああ、もう着替えてる時間はないわよね？ どうしようっ!?」

義姉であるクリスティーナは、自分と違っていつも完璧。美しさの頂点に立つ彼女の前に出るのはいつだって緊張する。

「可愛い」と思ってもらいたい。せめて「合格」でありたい。

不安な思いでウェスリーを見上げると、彼は呆れたようにため息を吐いた。

「はいはい。心配しなくても変じゃないよ。可愛い可愛い」

おぎなりの返事にムツとしたが、今は言い争っている場合ではない。

（お忙しいお義姉様がせっかく来てくださってるんだもの！）

「早く会いたい」という思いに突き動かされ、部屋を飛び出した。

「お義姉様っ！」

飛び込んだ応接室。白金の髪を美しく結い上げた女神がソファで寛いでいた。

こちらを認めた女神が微笑む。

「久しぶりね、トリシャ」

（ああ、なんてこと！　ますます美しさに磨きがかかっていらつしやる！）

二歳しか変わらないはずなのに。この自分との差は一体なんなのだ。

優しい碧の瞳に見つめられ、フラフラと引き寄せられる。思わず抱きついて甘えようと手を伸

ばした瞬間、女神の前に無料な腕が出された。

「……久しぶりだな、トリシャ」

丸太のような太い腕の持ち主。実の兄が、自分そっくりな碧い瞳でこちらを見上げていた。

「……お久しぶりです、お兄様」

ニコリと笑って挨拶を返す。それから、目の前の障害物を潜り抜け、義姉と兄の間に無理やり身体を滑り込ませた。



義姉の両手を取る。

「お義姉様、お元気でしたか？ お忙しかったのではないのですか？ 王都にはお仕事ですか？ いつまでこちらにいられるのですか？」

王都と辺境を繋ぐ転移陣は未だ試用段階。気軽に行き来できない現状、義姉が王都を訪れるのは仕事関係の時に限られる。

忙しい彼女がこの屋敷——タールベルクのタウンハウスを訪れる機会などそうそうない。

（せめて、一晚！ 一晚だけでも泊まっていてくれないかしら？）

煩惱のまま義姉を見つめる。

困ったように笑った彼女が、兄に視線を向けた。

「いつまでいられるかはフリード様次第。……いえ、トリシャ、貴女次第かしら？」

「え？ 私、ですか？」

「そうよ。……実は、フリード様から貴女にお話があるの。とっても面倒、いえ、大事なお話が」
気づくと、兄に向ける義姉の視線が冷え冷えとしている。

（お義姉様？）

初めて目にする義姉の態度。

向けられた兄本人も分かっているのだろう。見上げるほどの巨体を精一杯縮こまらせ、躊躇いがちに口を開いた。

「いや、あの、私は別に、トリシャに強制するつもりはないんだ。ただ——」

「フリード様。それではトリシャに伝わりません。ちゃんと最初から、ご自分の口で説明してください」

「わ、分かった！」

身体をビクリと震わせた兄が姿勢を正す。背筋をピンと伸ばし、後ろめたそうな顔でこちらを見下ろした。

意を決したように息を吸っては口を開く。が、またすぐに閉じられる。なかなか話し出さない様子に、義姉がウェスリーを呼んだ。

「ウェスリー。貴方もこっちに来て。一緒に聞いておきなさい」

扉の前で直立していたウェスリーと目が合った。「なんだろう？」と首を傾げる彼に「分からない」と首を横に振った。

ウェスリーが扉の前を離れ、向かいの席に座った。私もその隣へ移動するように促される。

本当に、一体なんの話をされるのだろう——

膨らむ不安。

嫌な気配を感じつつ、ウェスリーと並んで兄の言葉を待った。

十分後——

事情を説明し終えた兄が青い顔で俯く。その隣で、義姉がいつそ神々しいほどの冷めた笑みを浮かべている。

彼女の視線はずっとこちらに向いている。私の反応を待っているのだろう。分かっているが、急な話で頭が上手く回らない。

（何か、ちゃんとお返ししないと……）

頭を整理するため、兄がたった今明かした話を復唱する。

「……では、要するに、私は早急に婚約者を決める必要があるんですね？」

確認の言葉に、兄が弾かれたように顔を上げる。

「いや、違う！ 別に婚約者なんて決まなくていい！ 結婚なんてしなくていいんだ！ トリシヤはずっと家にいればいい！」

「でも、お兄様が言ったのよ。『私宛の釣書が届いている。お見合いする必要がある』って」

「そ、そうだが、それは――」

要領を得ない兄の言葉に、横から助け船が入った。

「フリード様、少し落ち着いてくださいませ」

小さく嘆息した義姉がこちらを向く。

「トリシヤ、少し補足するわね。まず、貴女に釣書が届いているのは本当よ。『転移網構築の事業に一枚噛ませる』っていう家がどんどん送りつけてくるから」

義姉の言葉に黙って頷く。

貴族社会において、利権の繋がりはずなわち家同士の繋がり。義姉主導の国家事業に関わりたい家が義妹の私に縁談を持ち込むのは、十分に納得のいく話だった。

義姉が「だけどね」と続ける。

「そうした有象無象はどうでもいいの。問題は……」

彼女の視線が再び温度を失い、兄に向けられる。

「フリード様が陛下から貴女宛の釣書を受け取ってしまったことよ」

「へ、陛下っ!? 国王陛下からですかっ!?」

自分の婚約がそんな大事になるなんて。

一気に血の気が引いた。

義姉の口から先ほどより深いため息が零れ落ちる。

「本当にもう。こんな面倒事を引き受けてしまうなんて」

（め、『面倒』……）

王命に近い事態を不敬な一言で切り捨てる義姉は、言葉通り、うんざりとした表情を浮かべている。

それにどう反応すればいいのか。迷っていると、隣から地を這うような声が聞こえた。

「フリード様。一体どういうことでしょうか？ なぜ、そのような話をお受けになったのですか？」

「ち、違うぞ、ウェスリー！ 俺は陛下から受け取ったわけではない。義父上に請われて仕方なく！」

「ウインクラーク公が？」

隣を見ると、眉間に深い皺を刻んだウェスリーが兄に鋭い視線を向けている。兄が慌てたように

何度も「うんうん」と大きく頷いた。

「私だつて断るつもりだったさ！　だが、横から義父上に『是非に』と言われてしまえば、私に断る術はなかったんだ！」

兄の視線がウエスリーから義姉、それからこちらへ向けられる。

「すまない、トリシャー！」

勢い良く下げられた頭は、こちらが何かを言う前にガバリと上げられた。

「だが、安心してくれ。見合いは全て断つてくれていい！　結婚などする必要はない。だから……！」

「ま、待つてください、お兄様」

話を聞く限り、見合いの件は納得した。

義姉にベタ惚れの兄が義姉の父に強く出られなかったのは分かる。

私自身に関しても、今まで婚約話がなかったほうがおかしいくらい。ほとんどの貴族令嬢が、この年には婚約が決まっている。

（婚約はいつかはしなくちゃいけないし、別に、お見合いを受けるのも……）

隣に座るウエスリーの横顔をそっと盗み見る。不機嫌な顔。真つ直ぐ前を向いたままの彼を確かめて、兄に視線を戻した。

「あの、一人くらいならお会いしてもいいとは思うんですが……」

消極的な「是」の言葉を口にする、心臓がギュッと締めつけられるのを感じた。

見知らぬ男性と会う。

もしかしたら、とんでもないことをしようとしているのかもしれない。

慣れない事態に恐怖し、再び隣を見る。

（ウエスリー……）

やはり彼は前を向いたまま。兄に対し、射殺さんばかりの視線を向けていた。

不意に、義姉が口を開く。

「ごめんなさいね、トリシャ。断れなかったフリード様が悪いとはいえ、父が余計な真似をしたわ」

「いえ！　陛下のご命令とあれば……」

「王命ではないわ。だから、そんなに畏まる必要はないし、貴女には当然、断る権利があるの」
そう言ってから、義姉は表情を改めて「でもね」と続ける。

「いい機会だから、聞いておこうと思って。トリシャは将来のことをどう考えているのかしら？」

「将来、ですか？」

「そう。勿論、フリード様の言うように、ターベルクにずっといてくれて構わないのよ。だけど、トリシャ、貴女はどうしたい？」

静かな声で澄んだ瞳で問われ、答えに迷う。

「私は……」

続く言葉が見つからない。三度、ウエスリーに視線を向けようとして踏みとどまった。

義姉がこちらを見ている。

（私が、どうしたいか……）

黙り込んだ私に、義姉が穏やかに笑った。

「考えてみて。貴女がどうしたいか。将来の選択肢に釣書の誰かが含まれる可能性が少しでもあるなら、それも踏まえて。ね？」

その言葉に頷きかけて、ふと浮かんだ疑問を口にする。

「お義姉様のご希望は？ 私に嫁ぐべき相手はいますか？」

辺境伯の妹として。領地——タールベルクのために。

一瞬、驚きに目を見開いた義姉は、すぐに花の綻ぶような笑みを浮かべた。

「いるわ。……貴女が生涯を共にしたいと思う人よ」



——ウェスリーは残って。頼みたいことがあるから。

クリスティーナの一言で応接室に残された自分を尻目に、トリシャはフワフワとした足取りで部屋を出ていった。

その背を見送って振り返ると、対象的な二つの眼差しにぶつかる。こちらに對し、すまなそうな表情を浮かべる主君と、その隣でネズミをいたぶる猫のような笑みを浮かべる奥方。

（最悪だ……）

一連の流れにうんざりしているし、腹が立っている。それに何より、今までにない焦燥を感じているというのに、これ以上、誂われる余裕なんてない。

「……ご用とはなんでしょうか？」

さつさと仕事を済ませようと、感情を排して告げる。

クリスティーナの顔から笑みが消え、つまらなそうな表情になった。ブスリとした口調で「貴方も悪いのよ」と咎められる。

「ウェスリー、貴方がさつさとトリシャに求婚しないから。婚約しておかないから、こんな面倒なことになっているんでしょう？」

グツと言葉に詰まった。

彼女の隣で、フリードが鬼の形相になる。先ほどの萎れた様子はどこへやら。今にも締め上げてきそうな顔をしていた。

（兄馬鹿め……）

独り言ちて、ため息と共に想いを吐露する。

「元より、俺から求めることは許されていません。選ぶのはトリシャです。……そりゃ、トリシャが俺を望んでくれるなら喜んで求婚しますけどね」

己の言葉に、フリードがなんとも言えない表情になった。安堵すればいいものを、困ったような憐れむような眼差しを向けられても困る。

クリスティーナが口を開いた。

「そう。……そういうことなら分かったわ」

無感情に告げられる言葉に、彼女の真意は測れない。

「悪いけれど、ウエスリー、その鞆をトリシャの部屋に運んでおいてね」

彼女の視線が部屋の隅に置かれた鞆かばんに向けられる。

大きめの旅行鞆りょこうかばん。男であれば、一週間分の荷物を詰め込めそうだが――

「トリシャ宛の釣書つりがきよ」

「は……？」

「言ったでしょう？ 馬鹿みたいな量が届いているって。一応、全部持ってきたわ」

言って、クリスティーナは鋭い視線をこちらに向ける。

「私はトリシャを家の駒こまにはしない。でもね、お人形扱いするつもりもないのよ」

底知れぬ瞳がジッとこちらを観察する。

「選択肢を用意することはできる。障害を取り除くことも。だけど、まずはトリシャの意志が大事。

あの子が何を望み、何を望まないか。それを示してくれなくちゃ」

冷めた目の奥にフツと温かな光が宿った。

「それに、貴方の意志もよ、ウエスリー。トリシャが貴方を選ぶかは置いておいて、想いを伝えるのは貴方の自由でしょう？」

甘言かんげんに思わず頷うなずきたくなる。

だが、脳裏脳裏に過るのは父の教え――シユミットの人間としての忠義だ。

加えて、トリシャの笑顔が己を臆病にする。浅ましい欲がああ笑顔けがを汚すところなど、想像したくもない。

答えられずにいると、クリスティーナが「難儀ねえ」と嘆息たんそくする。

返す言葉もなく、大人しく辞去を告げた。

部屋の隅に置かれた鞆かばん。

余計なことは考えず、指示通りにそれを運ぶ。持ち上げた瞬間、思わず舌打ちしそうになった。想像以上の重さ。

だが、意地でも降ろさずにそのまま部屋を後にする。

トリシャの部屋の扉をノックした。

しかし、返事がない。

少し迷った末、そっと扉を開けた。部屋の中では、小柄な身体が落ち着きなく、グルグルと歩き回っていた。

「……トリシャ？」

呼びかけに、彼女は足を止めて振り返った。

次の瞬間、小走りで駆け寄ってくる。

「ウエスリー！ ああね……！」

言いかけたトリシャは、すぐに言葉に詰まった。焦れば焦るほど言葉が出てこない彼女を、「大丈夫」と落ち着かせる。

「ちゃんと話を聞くから。あ、でも、その前にこれを置かせてくれる？」
鞆を指して言う、彼女が小首を傾げた。先ほど自分が結んだリボンが傾き、亜麻色の髪がフワリと流れる。

「鞆？ 何が入ってるの？」

「釣書。お見合い相手の」

途端、彼女の顔が引きつる。

その反応に安堵した自分に辟易しつつ、机の横に鞆を置いた。

開けて中身を並べるべきかと迷ったが、結局そのまま放置することに。

振り返ると、トリシャの視線が鞆に釘付けになっている。魔物でも見るような怯えた目。その目を見て、知らず口元が弛んだ。

「……それで？ トリシャが話したいことって何？」

問いかけに、トリシャがハッとこちらを見る。目にジワリと涙を浮かべるが、その涙が減多なことでは流れないのを知っている。

「……あの後、お兄様たち何か言っていた？ 私に『こうしてほしい』みたいなこと」

不安げな瞳に、「いいや」と首を横に振る。

置かれた鞆をチラリと見てから「ただ」と続ける。

「選ばなくてもいいってさ。アレはただの選択肢。トリシャはトリシャの好きなようにすればいい」

「そう……」

浮かない顔で俯く彼女を見下ろす。

濃い睫毛に縁取られた瞳に溜まる水滴に、徐々に怒りが湧いてきた。

（なんで、『嫌だ』って言わないの？）

明らかに不安がつているのに。拒絶しているのに。

彼女の口から「否」の言葉は出てこない。

半ば受け入れようとしている彼女に、理不尽だと分かっている怒りが抑えきれない。

「……トリシャ、言えないなら、俺が代わりにフリード様に断ってようか？」

昔から、領主であるフリードがトリシャに何かを強制することはなかった。

婚姻だってそうだ。

辺境という土地柄、タールベルクでは「家格の釣り合う相手」を探すことさえ難しい。だからこそ、「トリシャが望むように」と、フリードだけでなく辺境の皆が願ってきたのだ。

トリシャがゆるゆると首を横に振った。

「駄目よ。私だって領主の妹だもの。家のためにできることをしなくちゃ」

「っ！ そんなの誰も望んでないよ！」

物分かりのいい言葉に、冷静さを失う。

「陛下の下命^{かめい}を気にしてるの？ そんなの、フリード様のせいなんだし、言えば断^{ことわ}ってくれるよ」
フリードは明らかにトリシャの婚約を嫌^{きら}がっていた。

彼よりも少し現実的なクリスティーナの本心は見えないが、彼女とてトリシャの不幸を望むとは思えない。

トリシャが顔を上げた。碧^{あお}い瞳^{ひとみ}でじつと見上げてくる。

「ウェスリーも分かっているでしょう？ 昔とは違^{ちが}うわ。タールベルクは変わった。ううん。これからもっともつと変わっていくはずよ」

「トリシャ……」

返事^{こたへ}に窮^{きゅう}し、視線^{しせん}を逸^そらした。

彼女の静^{しず}かな声^{こゑ}が追^おってくる。

「転移網^{てんしき}の構築^{こうき}にはお金が掛^かかるし、開発^{かいはい}に関^{かん}わる魔導師^{まどうし}だつて集^あめなくちゃいけない」

「それは……」

否定^{ひてい}できないことが齒^はがゆかった。

確かに、タールベルクは変革^{へんかく}の時^{とき}にある。それも良い方向^{ほうきやう}に。

変革^{へんかく}を実現^{じつげん}するために主君夫妻^{しゅきんふさい}が奔走^{ほんそう}していることも承知^{しやうち}していた。金^{かね}や魔導師^{まどうし}の問題^{もんだい}だけではない。国^{くに}中^{ちゆう}を網羅^{もうら}する転移陣^{てんしきじん}の構築^{こうき}には各地^{かち}の領主^{りやうしゆ}の協力^{きやうりき}が必須^{ひつじゆ}で、王家^{わが}との繋^ながりも蔑^{あが}ろにはできない。

貴族^{きしやく}家に生まれた娘^{むすめ}であれば、家^{いへ}のための婚姻^{こんいん}を結^{むす}ぶのは必然^{ひつぜん}。模範^{もはん}的な臣下^{しんげ}であれば、主家^{しゅけ}の

良縁^{りやうえん}を望^{のぞ}み尽力^{じんりき}するのが道理^{だうり}だろう。

だが――

「……クリスティーナ様が言^いつてただろう？ トリシャは好きな人と結婚^{けっこん}すればいいんだよ」

「そう、だね……」

トリシャがクシャリと顔を歪^{ゆが}めて笑^{わら}った。全く、嬉^{うれ}しそうじゃない顔^{かほ}で。

「お義姉様^{ねえさま}まで私^{わたし}に甘^{あま}くなつてしまつて……、本^{ほん}当^{とう}に困^こつちゃうわ」

「トリシャ？」

「魔法^{まほう}も使^{つか}えない。お母^{はは}様^{さま}のように剣^{けん}が振^ふるえるわけでもない。……タールベルクのために、お兄^{にい}様^{さま}やお義姉様^{ねえさま}のために、私^{わたし}に何^{なに}ができると思う？」

泣^なきそうな顔^{かほ}で笑^{わら}う彼女^{かのじょ}に、なんと答^{こた}えればいいのか分^わからない。

――トリシャはトリシャのままでいいんだ。

心^{こゝろ}からそう思う^{おも}うが、それはきつと彼女の望^{のぞ}む答^{こた}えではない。

涙^{なみだ}を堪^こえた彼女^{かのじょ}が笑^{わら}う。

「私^{わたし}、ちゃんと考^{かんが}えてみる。考^{かんが}えて必要^{ひつやう}なら、お見^み合^あいも受^うけてみるつもりだよ」

「……そっか」

それ以外^{そこのほか}、返^{こた}す言^{こと}葉^はが見^みつからなかつた。

沈黙^{しんもく}が続^{つづ}き、逃^にげ出^でしたくなつたその時^{とき}、トリシャが「ねえ」と小さく声^{こゑ}を上げた。

「……どんな人^{ひと}を選^えべばいいか、一^{いっ}緒^{しょ}に考^{かんが}えてくれる？」

「つ……！」

口から飛び出しそうになった暴言を、なんとか呑み込む。

「ごめん、今は忙しいから！」

そう言い捨てて、トリシャに背を向けた。

今、自分はどんな顔をしているだろう。

彼女を怯えさせずにいられる自信がなかった。

「ウエスリー!?」

呼び止める声を見殺して部屋を飛び出す。扉を閉め、足早に廊下を進んだ。

曲がり角で現れた人影とぶつかりそうになり、咄嗟に身を引く。視線が交わり、相手が僅かに眉をひそめた。

「あら、酷い顔。トリシャに振られた？」

「やめてくださいよ。縁起でもない」

クリステイーナの軽口に、グシャグシャの気持ちに更に掻き乱される。

冷静な答えなんて返せそうにない。

彼女の横をすり抜けると、背後から澄んだ声が響いた。

「ウエスリー。貴方も、『欲しいもの』はちゃんと望んで」

言いたいことはあったが、結局、振り向くことなくその場を後にした。

彼女の言葉に込められた優しさは痛いほど伝わっている。

それでも駄目だ。動けない。

（トリシャが、俺を望んでくれない限り……）

臆病で情けない。卑怯者だと分かっているけど、彼女を失う恐怖には打ち克てなかった。

せめて、トリシャの想いが自分に向いていれば――

だが、ずっとそばにいたからこそ分かる。

彼女が己に向けるのは親愛。せいぜいが、家族としての愛情だ。そんな相手に、この胸の奥に渦

巻く恋情――醜く焦がれる想いを明かせるわけがない。

（……格好悪いな）

知らず自嘲が漏れた。

今この瞬間も、トリシャに選ばれる見知らぬ誰かに嫉妬している。そんな自分の愚かさを、彼女にだけは絶対知られたくなかった。



――トリシャの件もあるから、一週間ほど滞在するわ。

そう義姉が宣言したのは昨夜のこと。

「自分も残る」と大騒ぎする兄を、彼女は問答無用で領地に送り返した。

そうして――女神のごとき神々しさで、学園に向かう私とウエスリーを見送ってくれたのが今朝

の話だ。

大好きな義姉の王都滞在。本当なら、弾む気持ちを抑えきれないほどののに。

(あー、もおっ！)

学園の図書館。その最奥で、誰もいないのいいことに大きなため息を零す。

(どうして、ウエスリーにあんなこと言っちゃったんだろう)

——どんな人を選べばいいか、一緒に考えてくれる？

私を甘やかすことにかけては兄に引けをとらないウエスリー。気乗りしない見合いを断ってくれるという彼の気遣いを突っぱねて、自ら「やる」と宣言したのに。

直後、怖くなつて彼を頼った。

最悪だ。自分が恥ずかしくて情けない。

(……絶対、怒ってたよね)

昨日から口数の少ないウエスリーは、今朝、学園に通う馬車の中でもずっと黙り込んでいた。

彼のことだ、私の本音なんてきつとお見通しなんだろう。

最後の最後、勇気がなくてウエスリーに甘えた私の本音。

——ウエスリーならきつと止めてくれる。

(……はあ、もう。本当、最低)

放っておくどどこまでも落ち込んでいく気分。それを追い払うため、目の前のことに集中することにした。

大きく息をついて顔を上げる。棚に並ぶ本の背表紙に目を走らせた。

並ぶのは魔法学の専門書の数々。どれもこれも題名からして難解ですぐに気持ちが折れそうになる。

せめて、中身が想像できる本はないか。

視線を大きく上に向け、頭上の本を眺める。

その中に『術理幾何学入門』の文字を見つけた。

(……『入門』なら)

自分にも読めるかもしれない。

期待を込めて伸ばした手は、しかし、本の下部をなぞるだけ。背が足りず、ギッチリと隙間なく詰め込まれた本は引っぱり出せそうにない。

それだけで、もう駄目だった。

(なんで。私、なんでこんなに何もできないんだろう……)

届かなければ踏み台を持つてくればいい。

『術理幾何学』なんて未知の領域に拘る必要もない。

他に本はいくらでもあるのに、馬鹿みたいに悲しくなつて下を向く。目の奥が熱くなるのをグツと我慢していると、不意に背後から人の気配を感じた。

(ウエスリー……?)

静かに隣に立った人影に慌てて顔を上げる。

果たして、期待した彼の姿はそこになく――

「ほら。コレでいいか？」

「え……？」

無愛想にこちらに本を差し出すのは学園の教師だった。

魔導師の証であるローブに、お世辞にも整っているとは言えない癖のある茶色の髪。そこから覗く翠色の瞳がこちらを見下ろしている。

「……なんだ、この本じゃなかったのか？」

「あ！ いえ、この本です！」

反射的に手を伸ばし、彼から本を受け取った。

（なんだか、あの時みたい）

初めて義姉と出会った時。

義姉になる前のクリスティーナも、「本意じゃない」と言わんばかりの態度でそっけない優しさを示してくれた。それがたまらなく嬉しくて、彼女と話をしてみたい、仲良くなりたいと願ったのだ。

心臓がドキドキと音を立て始めた。

勇気を振り絞って一歩を踏み出した時のことを思い出す。仏頂面を晒す教師に向かって勢い良く頭を下げる。

「ありがとうございます、ボルツ先生！」

「……それで、トリシャ・タールベルク。淑女科のお前がなんでそんな本に手を出してる？ 魔法科に転科でもするつもりか？」

ボルツの言葉に慌てて首を横に振った。

「ち、違います！ ただ、あの、ちよつと、興味があつたと言いますか……」

渡された本を胸の内にギュッと抱え込む。「魔法の素養もないくせに」と、言われたわけでもないのに羞恥を覚えた。

ボルツの温度のない目が直視できずに顔を伏せる。頭の上から、興味なさげな「ふーん」という声が聞こえた。

「興味があるのは結構なことだが、お前にそれは早いだろ」

そう言つて、二、三步横に動いた彼が、本棚に手を伸ばす。手にした本を「ほれ」と言つてこちらに差し出した。

「先にこつちだな、魔法力学。初歩の初歩だから、読めんことはないだろうが、分からないところがあれば――」

言いかけた彼はハツとして口を閉じる。手にした本を引っ込め、気まずげに顔を逸らした。

「まあ、俺には関係ない話だな。余計なお世話だった」

「いえ！ あの、助かります。両方、両方とも読んでみます！」

ボルツの手から本を奪い、もう一度礼を言う。

なんとも言えない奇妙な顔を浮かべた彼は、本を持っていた手で前髪を掻き上げた。そのままガ

シガシと髪を掻き乱して、ボソリと呟く。

「……好きにしろ」

「はい、好きにします！」

答えると、ボルツはまた奇妙な表情を浮かべた。苦しいような、痛みに耐えるような。

彼の表情の意味が分からず、内心で首をひねる。

彼の口から「あー」という意味のない言葉が溢れ、意を決したといわんばかりの目がこちらを向いた。

「トリシャ・タールベルク」

「はい！」

「……お前、アレ見たか？」

彼の言う「アレ」が分からず、返事に困る。

それが伝わったのだろう。盛大なため息を吐いた彼が不機嫌に告げる。

「見合いの釣書だ」

「えっ!？」

端的に言われたが、なんのことだか分からぬほど鈍感にはなれなかった。先ほどまで、まさにそのことで悩んでいたのだから。

(で、でも、まさかボルツ先生の口からお見合いの話を聞くなんて……)

らしからぬという言葉がピツタリ来る彼だが、ここでそれを口にするというのはつまり――

「……ボルツ先生も、我が家に縁談を申し込んでくださったのですか？」

ここで、「私に」と言うほど自惚れるつもりはない。

ただ、ボルツは実力一つで男爵位を得、王立学園の教師に成り上がった人物だ。彼がタールベルクの力を必要とは思えない。

ボルツの真意が読めずにいると、彼はまたガシガシと自身の髪を掻き乱した。

「その様子じゃ、まだ見てないんだな？」

「す、すみません」

「いや、いい……」

「いい」と言いつつ、彼の表情は優れない。

釣書を放置している自分の非礼に、改めて肝が冷えた。

「も、申し訳ありません、先生！ 帰宅次第、すぐに目を通します！ 返事は兄を通して必ず……!」

「いいから、待て」

焦るこちらを、ボルツが片手を上げて制する。逡巡する様子を見せた彼は、硬い表情で告げた。

「……クリスティーナはなんて言っている？」

「え？ 義姉ですか？」

「そうだ。俺の釣書、というか、俺についてだな。『こいつはやめとけ』って言われなかったか？ 謙遜なのか自虐なのか。

首を横に振ることで彼の言葉を否定する。

「そうか……」

ボソリと零した彼が、「だったら」と告げた時、不意に私の名を呼ぶ声が聞こえた。

「トリシャ」

「ウエスリー！」

本棚の陰から現れた幼馴染は、私が一人でないのと知ると、瞬時に険しい表情を浮かべた。ボルツに対し警戒の眼差しを向ける。

しかし、警戒するだけでそれ以上は動かなかった。

いつもそうだ――

ウエスリーが私に対して過保護なのは間違いない。

でも、兄と違い、最後には必ず「私の意志」を尊重してくれる。

（最初は反対しても、『お願い』すれば、絶対に聞いてくれるんだよね）

今も、ボルツへ警戒心を向けたまま、私の出方を静かに待っている。ここで私が「先に帰って」と頼めば、きっと彼は素直に受け入れるだろう。

ぼんやり考え込んでいると、ボルツの嘆息が聞こえた。

彼が口を開く。

「あの女が何を考えているのかは知らんが、俺も腹を括るしかないみたいだな」

「ボルツ先生……？」

何に対して「腹を括る」のか。

尋ねることを躊躇するほど、彼の顔からは表情が抜け落ちていた。

「さっきの件だが、前向きに検討してくれ」

ボルツの視線が、私の持つ本に注がれる。

「……金も地位もないが、俺は魔導師だ。魔法に関してなら、お前が求めるもんを与えてやれる」
それだけ言うと、彼はクルリと背を向けた。こちらが答えに迷ううちに、彼は足音一つ立てずにその場を後にする。

遠ざかる背中を見送っていると、ウエスリーが隣に並ぶ気配がした。

「……トリシャ。『さっきの件』って何？」

「うん……」

前を向いたまま、曖昧に返事を濁す。

ボルツの姿は既に本棚の向こうへ消えていた。

彼はどんな思いで「前向きに」と言ったのだろう。その言動から、彼自身が見合いを望んでいるとは思えなかった。

疑念を抱きつつ、彼が最後に残した言葉が妙に耳にこびりついて離れない。

（……私が求めるもの）

頭の中で、何度もぐるぐると反芻した。



背中に視線を感じたまま、図書館を後にする。一步、建物の外に踏み出すと、明るい日差しに目を焼かれた。

片手を翳し、射すような陽を遮ったところで、ここに来た当初の目的——目当ての本を手にしていないことに気づく。

だが、今更なる気にはなれない。

そのまま日向を歩き続けた。

(……クソッ)

内心で零す舌打ちは無様な自分に対するもの。

先ほどの自身の言動に対する後悔だった。

なぜ、あんなことを言ってしまったのか。

きつと、心の準備もなく、件の少女と出会ったのが悪かった。最近の己を苛む悩みのタネ。

(トリシャ・タールベルク……)

自らの意思で彼女との見合いを望んだわけではない。

一回り以上年下の、しかも、学園の生徒。自分には天と地ほどの差がある。おまけに彼女の義姉は因縁の相手クリスティーナ・タールベルクだ。

本来なら、釣書を送ったところで一笑に付されて終わる。

それを期待してもいた。

だが、その期待が叶わぬことも覚悟していた。

——オズワルド・ボルツ、お前に頼みがある。

脳裏に蘇る声。

何度も悔やんだあの日の出来事を思い出す——

「……王太子自ら一介の教師に頼みとは。はてさて、一体どのような大命を任されるのでしょうか？」

呼び出された王宮。向かいに座る男の傲慢な瞳に、内心でため息を吐く。

(……やられたな)

王宮から学園に届いた召喚状。「教師の派遣」という名目と、記された召喚主の名に、つい引き受けてしまったのが運の尽き。

待っていたのは、想い人であるソフィア・アーメント一人ではなかった。

彼女の隣に婚約者である王太子アレクシス・シュタイアートの姿を見た時点で、嫌な予感を抱いていた。

それが、彼の第一声で確信へ変わる。

続く言葉を聞きたくない。

逃げ出したい思いで視線をアレクシスの隣へ向けた。
ソフィアと目が合う。

その瞬間、彼女の瞳に涙が溢れた。

「ソフィア——」

「ボルツ先生、お願い！ アレクシスのお願いを聞いてあげて！」

目に湛えた涙をポロリと零し、彼女が頭を下げる。

その姿に、口にした言葉の舌を飲み込んだ。

「元気にしていたか」、「王宮で困っていることはないか」、「自分が力になれることはないか」、それから、「もう、許してくれたのか」と。

聞きたいことはたくさんあった。

だが、彼女の態度に、どれ一つ口にすることができない。

代わりに、王太子の尊大な声が告げる。

「ボルツ、お前にタールベルクとの縁を結んでもらいたい」

「タールベルク？ 縁というのはまさか……」

過つたのは婚姻の二文字。

自身がまだ平民だった頃、「爵位を得る最も手取り早い手段」としていくつもの縁談が舞い込んだ。そのどれにも「諾」と答えることなく今の地位を築いたのは己の密かな誇り。

だというのにまさか——

「トリシャ・タールベルク。フリードの妹だ。幸運なことに、未だ婚約者がいない。お前には彼女と婚姻してもらおう」

「ご冗談をつ！」

咄嗟に吐き捨て、ソフィアの表情を窺う。

彼女は変わらぬ泣き顔で真剣な瞳を向けていた。自身の婚約者を止める様子はない。

「……冗談などではないさ」

アレクシスが鷹揚に告げる。

「王家としては、タールベルクの転移陣開発に早めに介入しておきたい。彼の家主導の開発を、いずれは王家のものとするつもりだ」

勝手かつ無謀な宣言に、奥歯をギリと噛みしめて問う。

「……なぜ、私なのですか？ 他に適任はいくらでもいるでしょう」

「ソフィアの提案だ。お前ほど魔法に優れ、王家への忠義篤い者はいないというからな」

（馬鹿なっ！）

王家への忠義など糞食らえだ。

睨みつけると、正面の男は不敵に笑った。

「少なくとも、ソフィアの力にはなってくれるのだろうか？ ……私もそれだけは信じられるんだよ、ボルツ先生」

瞬間、頭に血が上る。

ソフィアへの想いを見透かされている屈辱。「嵌められた」という思いが強くなる。始めから、ソフィアは餌だったのだ。

彼女を餌に己を駒にする。アレクシスの奸計を、ソフィアはどこまで理解し受け入れているのだろうか。

縋る思いで彼女の名を呼ぶ。

「ソフィア——」

「ボルツ先生なら絶対に大丈夫です！」

ソフィアが椅子から身を乗り出した。

「パウル君が教えてくれたんです。『クリスティーナ様が魔導師を探してる』って。だから、絶対上手くなります。ボルツ先生は最高の魔導師だもの！」

こちらを見つめる熱く浮かされたような瞳。

だが、少しも心に響くものはなかった。ただ、虚さが心を埋め尽くす。

「……そうか」

「ボルツ先生？」

——ソフィアにとって、自分はもう、「最高の魔導師」という肩書でしかないのか。

己の意志など関係ない。ただただ、「可能だから」という理由で役目を押しつけられる。

いつからなのだろう。彼女が己を「個」としてではなく、肩書で見ようになったのは。

（もしかして、最初から——）

その先を考えるのが恐ろしく、思考を止める。

「どうだ、オズワルド・ボルツ？ ソフィアたつての願いだ。聞き入れてくれるだろう？」

最早、抗う気力はなかった。黙したまま頭を垂れる。

まるで道化のようだ。

自嘲しても気は晴れない。

ただただ、ソフィアを泣かせるのが怖かった。彼女に「不要だ」と切り捨てられるのが恐ろしい。

下げた頭の向こうで、彼女が嬉しげに礼を言う。

アレクシスが淡々と告げた。

「なに、案ずるな。縁談は陛下経由で持ち込む。あちらも拒否などできんさ」

（——何が、『案ずるな』だ……）

不愉快な言葉を思い出し、独り言ちる。

足を止めて空を仰いだ。

澄んだ碧が、先ほど目にした少女の瞳を想起させる。

（トリシャ・タールベルク。辺境の箱入りお嬢様、か……）

こちらを見上げる真っ直ぐな瞳。教えを請うものの無垢な眼差し。

それを利用しようとしている。

自分がひどく薄汚い存在になり下がった気がした。

いつそのこと、釣書つりがきなど破棄されてしまえばいい——
ならば己の非とはならず、ソフィアに咎められることもないだろう。
だが、地を見下ろす。口からため息が零れ落ちた。



学園から戻る道すがら、なんだかずっとソワソワしていた。
ウェスリーのもの言いたげな視線に気づいてはいたが、言葉にしないのをいいことに最後までやり過ごした。

(……本当に、あるのかしら?)

鞆たばの中身が「大量の釣書つりがき」とは教えられたが、「誰のもの」という話はまったく聞いていない。
屋敷に戻ると、義姉への挨拶あいさつもそこに自室へ向かう。途中から、ウェスリーがついてくるのも気にならなくなった。

部屋の扉を開け、真っ直ぐ部屋の隅へ向かう。置きっぱなしの旅行鞆りょりょうかばんを持ち上げようとして、あまりの重さにすぐに断念した。

(どれだけ入ってるの!?)

仕方なく、一旦鞆たばを開けて重ねられた封筒のいくつかを持ち上げる。

欲張りすぎた重さにふらついて、机の上にドシンと音を立てて置いてしまった。弾みで、開きつ

ぱなしにしていた魔法学の教科書が落ちる。

「あ」と思う間もなく、背後から近づいたウェスリーが拾い上げ、こちらに差し出す。

「えっと……」

釣書つりがきの山が崩れてしまわないよう、未だ手は塞ふさがったまま。

目線で本棚を示して、お願いする。

「ごめんね、ウェスリー。本棚に戻しておいてくれる?」

無言で頷うなずいた彼は本棚に向かい、教科書をしまった。すぐに戻ってくると、私の代わりに釣書つりがきの山を支えてくれる。

「ありがとう、ウェスリー」

これでもやく中身を確認できる。

一番上、キラキラの箔押はくおしがされた封筒に手を伸ばす。

(……違う)

家紋に見覚えがあった。

どこぞの伯爵家の封筒を横に置き、次の封筒に手を伸ばす。上質な紙の手触り、家紋の刻印、目を皿のようにして探していく。

「……トリシャ」

「ん?」

作業に夢中で、ウェスリーの呼びかけに上の空うわそらで答えた。

減った釣書つりがきの山から手を離れた彼が、私の弾いた封筒を持ち上げて確かめる。

「何を、……誰を探しているんですか？」

「うん。えっと、さつき、『自分のものもあるから』って言われて……」

見覚えのない家紋に手を止める。封を切り、派手な飾り縁のついた二つ折りの台紙を出す。開くと、最初に飾り文字で書かれた人物名が躍っていた。

「……オズワルド・ボルツ。彼を選ぶんですか？」

不穏な声音。

珍しく不機嫌きげんを晒すウェスリーに慌てて「違う」と首を横に振る。

「別に、ボルツ先生がいいとかそういうんじゃない、ただ……」

——俺なら、お前の助けになれる。

あの言葉の真意を知りたかった。

「ほ、ほら、一度お話しくらいはいいと思わない？ 魔法科の先生とお話する機会なんてそうそうないし」

彼に対し、胸のときめきを覚えたわけではない。

けれど、もし仮に誰かを選ばないといけないとしたら。

（現実的に考えて、『悪くない選択肢』よね……）

ウェスリーの考えが知りたくて、彼の答え——反応を待った。

けれど、いつまでたっても彼は口を開かない。ただ、ガラス玉のような感情の见えない瞳で、ボ

ルツの釣書つりがきにじっと視線を落としていた。

釣書つりがきを抱えて部屋を出る。

小走りに向かうのはサロン——今なら義姉が寛くわいであるはずの部屋だ。ウェスリーは黙ったまま、いつも通りに後をついてくる。

サロンの扉を開けると、鼻腔びばうをくすぐる紅茶の香りと共に、予想外の声が聞こえてきた。

「……お兄様？」

領地に戻ったはずの兄が義姉の隣で寛くわいしている。ピツタリと隙間なく寄り添うのを「寛くわいである」と言っているのならば。

義姉の澄ました顔と対象的に相好さうごうを崩しっぱなしの兄が、こちらを向いた。

「なんだ、二人とも帰ってきてたのか」

笑顔で言った彼の視線が、私が胸に抱き込んだものに向けられる。途端、その顔が絶望に染まった。

「ト、トリシャ、それはもしや！」

弾かれたようにソファから立ち上がった兄が大腿に近づいてくる。

咄嗟とつさに、釣書つりがきを背中に隠した。

目の前に迫った巨体が伸ばしかけた手の行き先を失い、ワタワタと宙を彷徨さまよわせる。

兄の視線がウェスリーに向かう。「どういことだ」と無言で視線で問うているが、ウェスリー

は何も答えなかった。

「……お義姉様」

兄の存在は置いておき、義姉に声を掛ける。

薄い笑みを浮かべた彼女が「なあに？」と小首を傾げた。兄のように大騒ぎしない彼女の態度に安堵して、気になっていた問いを口にした。

「お義姉様は、お兄様に初めて会われた時、お兄様のことをどう思われましたか？」

「え？」

珍しく、義姉が虚を衝かれた表情を浮かべた。

彼女の視線が兄に向かう。つられてそちらを向くと、兄が抑えきれない好奇の眼差しを彼女に向けていた。

義姉が鮮やかな笑みを浮かべる。

「あのね、トリシャ。人の第一印象なんて当てにならないものなのよ？」

「そう、なのですか？」

「ええ」

頷いた義姉の笑みに、なぜだか言い知れぬ圧を感じる。

「最初の出会いでその人の全てを知るなんて無理でしょう？ 時間をかけて付き合ううちに、相手の好ましい面も好ましくない面も見えてくるものよ」

兄に向けられた義姉の笑みが深まる。

「……ただ、私はまだフリード様の好ましくない面を見つけていないのだけれど」

「クリスティーナッ！」

義姉の言葉に感極まった兄が、彼女のもとに駆け寄る。そのまま、ソファに座る彼女を抱きしめた。

「俺もだっ！ 俺もっ、クリスティーナの全てが好ましい！ 愛おしいと思っている!!」

「まあ、ありがとうございます」

兄の巨体に覆われた義姉の表情は窺い知れないが、その声には明らかに温度差があった。
(……なんだかなあ)

結局、義姉の答えからは兄の第一印象がどうだったのか、全く分からない。
だが、もしも、だ。

もしも、義姉が第一印象で兄を好んでいなかったとしたら——
(そんなに好きじゃない相手でも、夫婦になれば上手くい、のかな……?)

目の前の二人を見る限り、可能性はゼロではなさそうだ。
背中に隠した釣書を胸に抱え直し、ギョツと抱きしめた。

「……お兄様、お義姉様。私、ボルツ先生にお会いしてみようかと——」
「なっ！ 駄目だ、絶対に駄目だ！」

盛大に拒絶反応を見せた兄がこちらに歩み寄ってくる。
目の前で何かをまくしたてる兄の向こうで、義姉が僅かに眉をひそめた。暫く思索した後、彼女

が「そうね」と呟く。

「貴女が決めたことだもの。会ってみたいのなら、そうなさい」

言って、ニコリと笑みを浮かべた彼女は「但し」と言葉を続ける。

「一つだけ、条件があるわ」

「条件？」

義姉の紅い唇が、深い弧を描いた。

数日後。

善き日を選んで設けられたお見合いの当日。私は屋敷の応接室で微動だにできずにいた。

部屋の中、壁には天井まで届く花の飾り。真新しい絹のカーテン。これでもかと磨き上げられたテーブルは鏡のよう。茶会を超えた豪華な食事と菓子が繊細な器に盛りつけられ、部屋一杯に贅沢な茶葉の香りが立ち上っている。

そして、部屋の中央。主役のために用意された席には、めかしこんだドレス姿の私が座っている。（……どうしてこうなったのかしら？）

ボルツとの見合いを希望した際には、まさかここまで仰々しいものになるとは思ってもいなかった。

学園で会う延長とまではいかずとも、「王都のお店でお茶でもしながら」という想定は完全に裏切られた。

タールベルクの総力を結集した。そうとられてもおかしくない様相に——ドレスの重さも相まって、私は動けない。

不意に、ノックの音が聞こえて扉が開かれる。

「……失礼します。お客様をお連れしました」

現れたのはウエスリーだった。侍従のお仕着せに身を包み、髪をきちんと整えている。いつもより硬い表情の彼が頭を下げた。

その後ろから、背筋を伸ばしたボルツが現れる。スーツを纏っている。教壇に立つ姿とは異なる彼に、否応なく緊張が増す。

部屋に足を踏み入れた彼が頭を下げようとして、ピタリとその動きを止めた。

「辺境伯閣下？ ……夫人も。王都にいらつしやるとは存じませんでした」

彼の視線が私の両隣を交互に見る。

右隣で、両腕を組んだ兄が胸を張る。

「妹の一大事だ。兄として同席しないわけにはいかないだろう」

左隣で、紅茶のカップに口をつけた義姉がホウと吐息を漏らす。

「申し訳ありません、ボルツ先生。夫が我儘を言いまして」

カップが音も立てずにソーサーに戻され、テーブルに置かれる。

「ですがまあ、見合いの席に当主が立ち会うのは自然なこと。あまりお気になさらず、どうぞお座りください」